

意志と愛の存在論的認識論的役割を重んじるこれらの見方は、現代においても、私たちの活動し個を志向する現場を理解するに当たってひとつの示唆を与えているのではないだろうか。

質問 II

稲垣良典

前回のシンポジウムで松永氏が提起された問題の言いかえになると思うが、トマスにおいて分有は、形相あるいは形相的完全性の領域においてではなく、諸々の形相にたいしても現実態の関係に立つ存在そのものに即して考えられているのであってみれば、これをトマスにおけるプラトニズムあるいは新プラトニズム的要素として特徴づけることが適切であるかどうか、問題ではなからうか。トマスにおいては超越的名称の序列は、端的に言えば、善いもの——真なるもの——存在するものではなく、その逆とされていることに留意すべきであろう。つまりは、創造論として構想されたトマスの分有論を、(新)プラトニズムの展開あるいは変容として解釈することの是非について問題を提起したい。

これと関連するが『神学大全』の基本構想が発出・還帰という新プラトン哲学の原理にもとづくものなのか、あるいはむしろ救済史的な立場にもとづくものなのか、という問題を、今なお継続されている論争を頭においた上で提起したい。われわれはここで「中世哲学とプラトニズム」を主題としているが、いわゆる「中世哲学」の形成に寄与したのはほとんど例外なしに神学者であったことを考えると、前回のシンポジウムで泉氏が指摘されたような側面がトマスの場合にもより鋭くうきほりにされるかもしれない。(ここに記した内容はシンポジウムにおいて実際に発言したものであるが、当日、時間があれば発言して色々な方から教えていただきたいと考えていたことであり、司会者のお許しを得てここに掲げさせていただいた。)